

第3章

本会議・サイト活動

新潟サイト(7月28日～8月5日)

■サイトコーディネーター

井上聡美

栗原隆太郎

Carly Lauffer

Taylor Luczak

(サイトスタッフ)

北林未菜

櫻井千浪

佐々木いくえ

杉山和

棚田壮太

八木澤籠大

山下祐里奈

■サイト概要

豊かな自然と美しい景観に恵まれ、日本一の収穫量を誇る「米どころ」として日本の食卓を支えてきた新潟県。しかし近年市場開放の流れの中で、農業をはじめとする地域産業の革新が求められている。これまで、度重なる大地震に見舞われてきた新潟が、地域の特色を生かしながら復興し、新しく生まれ変わってきた過程を学び、広く地域の再生や活性化のあり方を考える。都会への人口流出と少子高齢化が進む日本で、地方都市がどのようにして新たな価値を創出し、日本の成長発展に貢献できるかを考察する。

■活動の指針と目標

- ・アメリカ側参加者と日本側参加者の相互理解のきっかけを作る
- ・文化体験やホームステイを通して日本の文化に対する理解を深める
- ・地震や自然災害とその復興のあり方を知る
- ・原子力発電所とその実情を知る

■サイト日程

7月28日(木) アメリカ側参加者到着

7月29日(金) 開会式、分科会活動、スキット

7月30日(土) 分科会活動、北方文化博物館訪問、文化体験、バーベキュー

7月31日(日) 山古志村訪問、新潟フォーラム

8月1日(月) 分科会活動

8月2日(火) 柏崎刈羽原子力発電所、エネルギーフォーラム、ながおか祭り

8月3日(水) 分科会活動、リフレクション、ホームステイ

8月4日(木) ホームステイ

8月5日(金) ホームステイ

※宿泊場所 NSG 学生総合プラザ STEP、菱風荘

■具体的な活動

・開会式

開会式はNSG 学生総合プラザにて開催された。最初に、第63回日米学生会議主催団体である財団法人国際教育振興会 大井孝理事長の挨拶と、「日米学生会議 in 新潟」の共催団体である新潟日米協会会長 渡辺敏彦氏から挨拶をいただいた。また、内閣総理大臣 菅直人氏からのメッセージ、新潟県副知事 森邦雄氏、新潟市長 篠田 昭氏から祝辞をいただき、県内からも多くの方々がご来場くださった。

周囲の第63回日米学生会議への期待と参加者としての責任を感じた。開会式に出席する前は、この1カ月間、出会ったばかりのアメリカ側参加者と英語で会話し、両国の参加者と仲良くしていけるのだろうか、どのような議論ができるのだろうかという不安で胸がいっぱいだった。しかし、これほど歴史のある重要な会議に参加できることは非常に光栄であり、その中で自分の力を出し切り、自分の成長に必ずつなげたいと感じた。第63回日米学生会議が始まるのだと改めて認識し、

気を引き締めるとともに、参加者としての自覚を養うことができた。(八木澤 龍大)



開会式にて日本側実行委員長挨拶の様子



開会式後、参加者の皆様と

・スキット

日本側参加者とアメリカ側参加者に分かれて、各30分程度自国の文化を紹介する寸劇を披露した。日本側の寸劇は、日本アニメの有名な5匹のキャラクターが、会社での名刺交換や合同コンパなど日本の文化を経験するというものであった。事前に衣装を揃え、フェイスペイントを塗るなど入念に準備して、日本文化をユーモアを交えて伝えることができた。また、日本側参加者として団結する良い機会ともなった。一方、アメリカ側の寸劇は、カップルがアメリカの大規模ショッピングセンターに入り、アメリカ文化を象徴するディズニールランド、マウントラッシュモア、スターバックスなどに空間旅行をするというものであった。アメリカ側の台本中の冗談や演技のダイナミックさに感激した。参加者一人ひとりのキャラクターを把握する良い機会となった。(北林 未菜)

・北方文化博物館訪問

250年余もの歴史を持ち、新潟とアメリカの関係の象徴でもある北方文化博物館において、日本の伝統文化体験を行い、日米間の歴史と日本の文化に関する知識を深めた。北方文化博物館では、伝統的な日本の家屋とその敷地の広さに驚かされた。庭園の中を歩き、日本の夏の美しさを感じることができた。新潟産のおいしいお米でつくられたおにぎり、漬物、豚汁、とうもろこしをいただき、日本の家庭料理を味わうことができた。八代目当主伊藤 文吉氏より北方文化博物館の概要を説明していただき、戦後の日本における伝統文化の重要性とその継承の難しさを学ぶことができた。館内を見学した後、琴や詩吟を聞きながら華道吟(生け花のパフォーマンス)を鑑賞し、茶道を体験した。北方文化博物館での見学を通して、他者を尊敬することに重きを置く日本の文化の重要性を学んだ。(佐々木 いくえ)



茶道体験の様子

・山古志村訪問

2004年の新潟県中越地震によって、最も大きな被害を受けたと言われている山古志村を訪問し、震災がもたらした厳しい現実とその復興過程を知ること、東日本大震災後の復興への手がかりを考察した。山古志村に到着してすぐに、山古志村の復興に関するビデオを鑑賞した。震災により、自宅のみならず伝統のコイや闘牛を失い、精神的な支柱を喪失してしまった山古志村の人々が、山古志の文化を軸の一つのビジョンを持って復興に取り組んできたことを学んだ。その後の村

の見学では、震災時に土砂崩れで川がせき止められた際、下流の被害を最小限に抑えるべく水没した地区を訪れた。上流から流された家々がそのままの状態に残されている様子を見て、美しい自然に囲まれた村が地震によって受けた傷あとに、改めてショックを受けた。

山古志村が受けた被害とその復興の軌跡を現地で見学できたことは、東日本大震災の起こった年の日米学生会議にとって大きな意味があったと感じている。実際にその地に立ってみることで、より身近に震災に向き合うきっかけとなったと考える。(櫻井 千浪)



山古志村見学の様子

・新潟フォーラム

新潟県は、新潟県中越地震、新潟県中越沖地震という2つの大地震を経験している。その2つの地震の復興過程を通して官民学がどのように手を取り合ってきたのかを学び、東日本大震災の復興の展望を新潟県内の大学生とともに学生の視点から考えた。

冒頭では、新潟県県民生活・環境部震災復興支援課課長の水沢 泰正氏が、大震災からの復興について説明された後、日本側参加者で東北福祉大学に通う佐々木いくえが、東日本大震災における復興支援策について発表を行った。その後、元山古志村村長として実際に震災時に現場で活躍された衆議院議員の長島 忠美氏、社団法人中越防災安全推進機構理事である稲垣 文彦氏、特定非営利活動法人 JEN の濱坂都氏を迎え、「官民学か

ら考える復興 ～日米の学生に、今できること～」というテーマのもと、関連なパネルディスカッションが行われた。三者に共通していたのは、政府やボランティアではなく、市民自らの手によって実現する復興の必要性であった。その後、日米双方の参加者と現地大学生による復興支援に関する発表と全体での意見交換が行われ、今後日米の学生が担う役割について考えを共有した。(棚田 壮太)



新潟フォーラムにて参加者による発表の様子

・柏崎刈羽原子力発電所訪問、エネルギーフォーラム

世界最大規模の原子力発電所である柏崎刈羽原子力発電所を訪問し、講演会を通して、安全性や効率性という観点から原子力発電について考察した。まず、東京電力の職員の方より、柏崎刈羽原子力発電所における地震対策や津波対策の概要の説明を受けた。そして、発電所内の資料館を訪ね、原子力発電の仕組みを学んだあと、実際の発電施設に行き、発電施設内の原子炉格納容器やタービンなど発電設備の一部を見学した。午後には、原子力発電所の情報の透明性を確保するために柏崎市内で活動されている地域の会代表の新野 良子氏よりご講演をいただいた。

東京電力の方による説明で、柏崎刈羽原子力発電所の過去の事故についてあまり触れられていなかったのは残念だったが、自分なりに発電施設や資料館の見学から福島第一原子力発電の事態の深刻さをイメージできたと思う。また、通常は見学許可を得るのが難しい原子力発電所を見学できた

ことは貴重な経験であったと感じる。福島第一原子力発電所の事故を受けてなお、見学や説明会を受け入れてくださった東京電力の方々に感謝いたします。(杉山 和)

・ホームステイ

8月3日夕刻から8月5日早朝まで、新潟に住むご家庭でホームステイをさせていただいた。アメリカ側参加者が、日本の家庭で生活をし、文化や生活様式を体験することはもちろん日本側参加者もまた、ホストファミリーとアメリカ側参加者との橋渡し役になりつつ、日本の魅力を再発見することができた。

アメリカ側参加者とともに、新潟の温かい家庭に受け入れていただき、非常に有意義で楽しい時間を過ごした。新潟市内を一望できる展望施設や、古くから地域の人々に親しまれてきた神社、伝統的な茶室など、様々な観光スポットに連れて行っていただき、新潟について多くのことを学ぶことができた。また、地元の剣道教室にお招きいただき、日本の伝統的な武術を学びつつ、地域の方々に触れ合うことができた。なにより10人以上の大家族で囲む夕食の食卓は賑やかで温かく、改めて家族の大切さを実感したと同時に、都会で一人暮らしをする私は、故郷の家族がとても恋しくなった。実際に新潟に住むご家庭のもとでホームステイすることで、より地域に密着した学びを実現できたとともに、人々の優しさに触れ、人間的にも豊かになれたと感じている。(山下 祐里奈)



ホームステイのご家庭にて

■サイトコーディネーター後記

当初私たちが掲げていた新潟サイトでの目標は、「『地方都市』として新潟が果たしている役割を探ること」と「参加者同士の団結を深めること」であった。しかし、3月11日の東日本大震災を受け、新潟サイトの主目的を「震災からの復興に向けて私たちができることを考察すること」に改め、その実現に向けて準備を重ねた。

本会議では、新潟フォーラムや山古志村訪問等を通じて、大地震を経験された方々や復興に携わっている方々からお話をうかがい、そして実際に被災地に赴いたことによって、多くの参加者が「震災からの復興」を自分の問題として捉えることができた。一方で、柏崎刈羽原子力発電所を訪問した際は、世論と参加者に反原子力発電の気運が高まっていたせいか、冷静に現状を分析することが難しく感じられた。自らの問題としてひきつけながら、俯瞰的な視野で物事を見ることの難しさを感じた。今後、参加者には新潟サイトでの経験を生かし、そのバランスを保つことに留意しながら、東日本大震災や世界の震災からの復興にいかに関与できるかを考え、行動に移して欲しいと切に願っている。

もう一つの目的であった「参加者同士の団結を深めること」は、新潟サイトだからこそ達成することができた。都会の雑踏から離れた落ち着いた環境の中でじっくりと会話ができたこと、迫力満点の新潟総踊りや長岡花火に共に感動したこと、さらにはホームステイで「家族」の一員として生活したこと。このような新潟ならではの環境や経験が、参加者の団結を深めることに大きく寄与し、第63回日米学生会議が密度の濃い1ヵ月となることを約束してくれた。

本会議を終え、第63回日米学生会議の第1サイトとして新潟を選んで良かった、と心から感じている。非常に貴重で有意義な時間を過ごさせていただいた新潟の皆様、ならびに会議を運営するに当たってご協力いただいた全ての方々に心から感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございました。(井上 聡美、栗原 隆太郎)

京都 / 滋賀サイト (8月5日～8月10日)

■サイトコーディネーター

有川慧

中澤耕己

Ashley Hill

Justin Perkins

(サイトスタッフ)

佐藤安里紗

伊藤あゆみ

川邊拓也

杉岡昌太

多鹿ちなみ

中川渉

宮内雄飛

■サイト概要

歴史的な寺社仏閣が並び、日本の伝統や文化遺産が生活の中に息づく京都。グローバル化に伴って価値観が多様化し、長い間受け継がれてきた日本文化の存在感が薄れる中、日本の社会と文化を形作っている歴史や伝統に今一度焦点を当てる。日本固有の価値とは何かを問い、再発見することから、現代の日本社会の中で今後それをどのように活かし、融合させていくかを検討する。また、美しい自然と豊かな歴史的資産を持つ滋賀では、現地への視察や人々との対話を通して、琵琶湖の保全活動や自然との共生について考える。

■活動の指針と目標

- ・現代に生きる伝統文化の在り方を問い直す
- ・湖と共に生きる人々の暮らしに触れ、環境問題を身近に感じる
- ・分科会の議論を活かし、東日本大震災について考察する

■サイト日程

8月5日(金) 新潟から到着、サイトオリエンテーション、分科会活動

8月6日(土) 広島ワークショップ、分科会活動

8月7日(日) 琵琶湖フィールドトリップ、分科会活動

8月8日(月) 企業訪問、分科会活動

8月9日(火) 京都中間報告会、京都観光、リフレクション

8月10日(水) 沖縄へ出発

※宿泊場所 立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命 21

■具体的な活動

・広島ワークショップ

第63回日米学生会議の期間中に8月6日を迎えるにあたり、日米を代表する学生として「ヒロシマ」は必要不可欠なトピックであった。

日本側参加者の多くは5月下旬に行われた事前研修で広島を訪れていたが、6日は「ヒロシマ」についてだけでなく、平和の定義や核の利用なども含めた多岐にわたる議論を展開した。

まず、立命館大学衣笠キャンパスで、広島事前研修スタッフからの研修報告が行われた。その後、日米学生会議OBでもある三重大学の児玉克哉教授によるご講演を受け、立命館大学国際平和ミュージアムを見学し、最後に小グループに分かれて議論を行った。そこでは、戦争や原子爆弾投下の是非など、通常の学生交流プログラムでは避けられがちなトピックを真剣に語り合うことができた。

日本側参加者として、また広島ワークショップに多少関わっていた身として、アメリカの学生が想像以上に「ヒロシマ」について興味を抱き、知識を持っていたことに驚くとともに、さらに深い議論が行える可能性を感じることができた1日だった。(多鹿ちなみ)



児玉先生によるレクチャーの様子

・琵琶湖フィールドトリップ

(1) 琵琶湖上での活動

琵琶湖汽船の環境船「megumi」に乗船し、琵琶湖に浮かぶ沖島に向かった。当日は天候に恵まれ、琵琶湖の景色を眺めながら琵琶湖の抱える環境問題について理解を深めた。船上では、国際湖沼環境委員会 (ILEC) 研究員の Thomas Ballatore 氏や、NPO 法人碧いびわ湖で代表を務める村上悟氏からご講演をいただくとともに、バンドン採水器を用いた簡単な水質調査を行った。Thomas Ballatore 氏には、歴史的経緯を踏まえながら琵琶湖の抱える問題をユーモア溢れる形で説明していただいた。村上悟氏には、湖と人々が共存する生活を例に挙げ、いま私たちに何ができるかを参加者各々に問いかける講演をしていただいた。講演後には、北湖でバンドン採水器を用いて深度 70m の水を採集し試飲した。真夏の日差しの下で飲む琵琶湖の水に心も体も潤った。(宮内 雄飛)

(2) 沖島での活動

沖島では、主に地引網漁体験、島内散策、漁業組合長のお話をうかがうという 3 つのプログラムを行った。沖島では湖岸に畑や家々が続き、木々の緑が眩しかった。浜に着くと皆交代で地引網を引き、自然と共に生きる大変さを実感し、獲れた魚を見た時には達成感でいっぱいになった。事前に聞いていたが、やはり外来種が多く琵琶湖の現実を目の当たりにした。

その後、島の中心に広がる住宅街を歩き、沖島

に住んでいらっしゃる方々の生活を垣間見ることができた。歩いていると、まるで違う世界に迷い込んだかのような錯覚を受けた。都会に住んでいる自分たちがいかに便利さを追求し、沖島のような自然に密接した生活様式を忘れているかを考える良い機会だった。

最後に沖島漁業組合の漁師の方々にお話をうかがった。沖島では、若者が以前より農業だけでなく漁業にも関心を示さなくなっているということが印象的だった。私たち若者が沖島の現状について深く知り、考えることで、世界的な環境問題への見方も変わるのではないかと思った。(佐藤 安里紗)



採水体験の様子



地引き網体験の様子

・企業訪問

長年にわたり地元の産業振興に力を入れている中小企業を訪問した。井上仏壇、松栄堂(お香)、龍村美術織物、丸久小山園(お茶)、淀川製作所(電気自動車)という 5 つの選択肢の中から、参加者

の興味ある企業にグループに分かれて訪問した。どの企業も品質本位の老舗でありながら、時代性を意識した事業を行っており、生活に結びついた日本伝統の力強さを感じさせるものばかりであった。アメリカ側参加者はもちろんのこと、日本側参加者も自国の文化を直接的に再認識する良い機会であった。2006年に改正され、「日本の伝統と文化」を愛し、「他国を尊重する」などの文書が盛り込まれた教育基本法に見られるような、衰退する国民道徳への危惧は、「本物」を鑑賞し体験することから解消されていく。そのうえで、国際社会に生きる日本人としての自覚や誇りを養うためにも、今回の伝統文化の学習は大変有意義であったと言える。(中川 渉)

私たちは創業100年余の老舗、龍村美術織物を訪問し、伝統産業がいかに現代に活かされているかを考えさせられた。最初に訪れたのは同社工場であった。袋帯の製作行程を見学し、織糸や織機の歴史などの詳細な説明を受けた。完成した美しい織物を見て、参加者から歓声があがった。ジャガードの改良過程や厳格な品質管理など、行程の随所にこだわりが見受けられた。

工場見学の後は本社で作品を多数鑑賞した。奈良の正倉院裂や名物裂、祇園祭の前懸など様々な復元織物のほか、航空機、新幹線のシート生地も見せていただいた。織構造、染料の種類から始まる緻密な作業行程や織物にまつわる逸話を教えていただき、織物の深遠さを垣間見たような気がした。

また、龍村美術織物はFENDIやクリスチャン・ディオールなどの海外ブランドとも連携している。意外にも、国際化を過度に意識することはないそうだが、各々の製品を確実に仕上げ培ってきた高い技術と自信が、何よりも強い国際競争力となっているようだった。(伊藤 あゆみ)



龍村美術織物 工場見学の様子

・京都中間報告会

会議の中盤で迎えた京都中間報告会では、各分科会がそれまでの議論の経過と今後の展望について発表した。また、3月に発生した東日本大震災とそれに付随する諸問題について、各分科会が関連の深いトピックを選び、それに対する考察を述べることで、東日本大震災に対する多角的な視座を得ることを目的とした。

各分科会の日本側参加者とアメリカ側参加者が協力し、学生として、また分科会として今回の悲惨な地震に対して学生として何ができるかを議論した結果、日本側参加者だけでは考えつかないような様々な観点が内包されていた。そして、日米学生会議が始まってから約2週間という短い期間を想像させないような、生産的かつ創造力豊かな発表が全ての分科会で見受けられた。(杉岡 昌太)



京都中間報告会の様子

・京都観光

中間報告会を終えた後に、京都観光を行った。参加者たちは、7つの候補スポット（平安神宮、金閣寺、銀閣寺、清水寺、京都国際マンガミュージアム、三十三間堂、八坂神社）から1つを選択し、関西の高校に通う生徒の案内の下、各観光地を訪問した。

京都には、日本を代表する観光名所が多数あり、歴史の持つ重みや伝統的な味わいをそれぞれが醸し出していた。アメリカ側参加者にとって、日本文化の持つ魅力を生で体験する良い機会であったと思う。同時に、日本側参加者にとっては、近年のグローバル化に伴い「自国文化離れ」が懸念されている中で、改めて自国の持つ文化の良さに触れることができた。（川邊 拓也）



銀閣寺にて



平安神宮にて

■サイトコーディネーター後記

京都/滋賀サイトでは、現在その土地で生活されている方々との触れ合いを大切に活動を行うように心がけた。沖島では漁師の方をはじめとする島民の方々の生活に触れさせていただいた。また、企業訪問では、伝統工芸や歴史ある地元の産業を活かしながらも時代に合わせた事業を展開されている企業の方から、直にお話をうかがうことができた。京都観光は、現地の高校生に案内をお願いすることで、参加者と高校生の交流を促進し、これからの将来を担う同世代として、共に伝統について問い直す機会となった。

日本開催の日米学生会議では、京都を中心とした関西地方はほとんどの回で開催地となるため、今回いかにサイトの軸を定め、オリジナリティを出すことができるか苦心する部分もあった。そんな中、琵琶湖フィールドトリップでは琵琶湖汽船株式会社の川戸良幸常務取締役、滋賀県立大学の上田洋平先生に企画段階から大変お世話になり、また、現地の高校生の募集の際には京都市教育委員会の山本悦子様にご協力いただいた。宿泊施設に関しては、立命館大学国際部海外留学課の竹花安子課長補佐に窓口となっていただき、立命館大学のエポック立命21を提供していただいた。他にも、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室の浅原純様は、同志社大学を会場として使用する際に多大なるご協力をくださった。サイトの企画全般にアドバイスやご提案をくださった日米学生会議同窓会関西幹事の竹本秀人様、京都府をはじめとする行政への後援申請の際にお手伝いいただいた日米学生会議OBの寶槻徹様に、この場を借りて御礼申し上げたい。参加者から各企画とも学ぶことが多かったとの声が上がったが、私も実行委員のみでは決して完遂しえなかったと確信している。多くの方の陰日向からのご協力があってこそ実現した企画ばかりだった。ご支援いただいた皆様に心より御礼申し上げ、サイトコーディネーター後記とさせていただきます。（有川 慧、中澤 耕己）

沖縄サイト(8月10日～8月15日)

■サイトコーディネーター

竹内智洋

山田晃永

Christina Ryu

Kunihiro Shimoji (下地邦拓)

(サイトスタッフ)

石川恵

小田康弘

伊藤実梨

富沢瑠美

上江洲仁子

小林歩

阿部彩織

■サイト概要

在日米軍基地の75%が集中し、太平洋戦争で国内唯一の地上戦が行われた沖縄。このような地で、日米の学生が県民を交え、安全保障と平和について話し合い、各自が自分なりの意見を持つ意義は大きい。また、日本と中国の中継地として栄えた琉球王国の豊かな文化と差別の歴史についても学ぶ。基地と観光にとどまらず、環境や教育などへ取り組む姿から今日そして明日の沖縄を考えたい。

■活動の指針と目標

- ・在沖米軍基地問題と安全保障について多角的な視点を得る
- ・太平洋戦争(沖縄戦)についての学習を通して平和について考える
- ・沖縄特有の文化を体験する

■サイト日程

8月10日(水) 京都から到着、サイトオリエンテーション

8月11日(木) 分科会活動、名桜大学教授仲地清氏のご講演、名護中学校交流会、名護市長稲嶺進氏のご講演

8月12日(金) 辺野古見学、キャンプ・フォスター見学、宜野湾市立普天間第二小学校見学、首里城見学、分科会活動

8月13日(土) 宜野湾市基地政策部新里優氏のご講演、分科会活動、沖縄フォーラム、県内の高校生・大学生との意見交換会、レセプション

8月14日(日) 平和学習(糸数壕、荒崎海岸等見学)、分科会活動

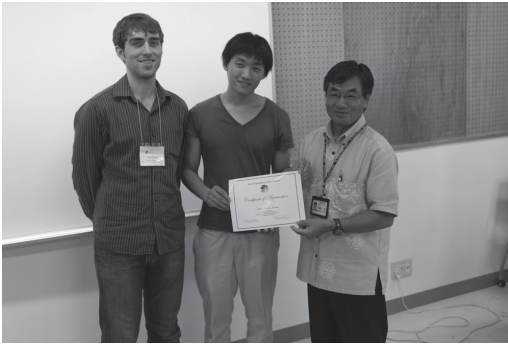
8月15日(月) 元ひめゆり学徒隊宮良ルリ氏のご講演、東京へ出発

※宿泊場所 山田荘、ステラリゾート

■具体的な活動

- ・名桜大学教授 仲地清氏・名護市長 稲嶺進氏 講演

仲地教授は沖縄の歴史、経済、治安等多様な側面に触れながら、沖縄独自の平和を強く望む文化や精神と関連付け、沖縄の基地問題の全体像を示して下さった。稲嶺市長は沖縄への負担集中、政府から自治体への交付金、基地の抑止力としての役割、市民生活の安全性など様々な視点から基地問題を見つめた上で、名護市へのさらなる基地移設に反対すると述べられた。最後に、基地に対する問題意識の風化を危惧していることを強調された。講演後、日米の学生から普天間基地移設問題の渦中にある自治体に対して多くの質問が上がった。両講演を通し基地問題がいかに複雑かつ深刻で、解決までの道のりが険しいかを再認識した。(伊藤 実梨)



名護市長稲嶺進氏と

・名護中学校交流会

名護中学校の生徒 36 名を招待し、名桜大学で交流会を開催した。まず、自己紹介や英語のゲームを行い、親睦を深めた。次に、日米学生会議参加者の代表が、クイズを交えながら両国の大学を紹介した。最後に、事前に募ったトピックをもとに、少人数の班に分かれて意見交換を行った。最初は緊張でこわばった表情をしていた中学生も、交流会の最後には満面の笑みを浮かべて日米学生会議参加者が作ったアーチを通して退場した。(上江洲 仁子)



名護中学校交流会の様子

・辺野古見学

普天間基地の移設予定地である辺野古岬では、へり基地建設阻止協議会(命を守る会)代表の西

川征夫氏のお話をうかがった。「命を守る会」は、辺野古区が基地移設反対を議決したにもかかわらず、迅速な対応を取らない名護市に痺れを切らした地元市民によって 1997 年 8 月に発足し、キャンプ・シュワブ横の海岸で 10 年以上座り込みを続けてきた。発足当時は 80 名近く座り込みに参加していたが、現在ではその人数は半減している。以前に比べ若者が来なくなっているため、参加者の大部分が 65 歳以上となり、高齢化に悩まされている。住民の間でも基地移設に関して賛否が分かれているが、「地元住民が結束して NO と言える環境をつくること」を目的に活動してきた。静かな海岸に建つフェンスに世界中から寄せられた平和を願う旗が掲げられ、砂浜では子供達が遊んでいるのが印象的だった。普天間基地移設問題の解決の難しさを再認識させられた。(石川 恵)

・キャンプ・フォスター見学

普天間基地の関連施設であるキャンプ・フォスターにおいて昼食会、講演会、施設見学を行った。在沖米海兵隊外交政策部次長ロバート・エルドリッチ氏の講演では、東日本大震災における復興支援などが例に挙げられ、在日米軍が日本や地域のコミュニティに貢献しているという点が強調されていた。施設見学では、娯楽施設、病院、学校などを見ることができ、基地内が一つの街として機能している様子がうかがえた。見学後のバスの中では日米の学生間で活発に議論が交わされた。辺野古や普天間第二小学校の訪問という前後の活動と合わせて、在沖米軍基地問題を実際に肌で感じ、多様な視点から捉えることができたので、有意義な学びとなった。(小林 歩)

・宜野湾市立普天間第二小学校見学

校長の知念春美氏のご案内で、宜野湾市立普天間第二小学校を見学した。校舎屋上に上がってまず目にしたのは、左右に長く伸びて広がる米軍普天間飛行場の滑走路であった。多い日でどれくらいの離発着があるか説明していただき、爆音で授業や行事が中断されることがしばしばあるとうか

がった。基地がいかに教育環境、生活環境を脅かしているか身に染みて理解できた一方、児童の安全確保のためには、対症療法的ではあるが学校の敷地移転をするべきだという声も上がった。(小田 康弘)



宜野湾市立普天間第二小学校屋上にて

・宜野湾市基地政策部 新里優氏 ご講演

嘉数高台公園を訪れた日はよく晴れていて、綺麗な青空の下に海岸線、市街地、普天間基地などを一望できた。宜野湾市基地政策部基地渉外課課長の新里優氏のお話を聞くまで、この高台が沖縄戦の激戦地であったこと、北に見える海岸が米軍上陸の地であったことを忘れてしまうほど、美しく平和な佇まいであった。新里氏は沖縄の基地の現状や普天間基地移設問題についてもこの場所で説明して下さり、沖縄の過去、現在、未来を考える機会となった。(小田 康弘)

・沖縄フォーラム

沖縄フォーラムでは、沖縄の過去、現在、未来について多角的なご講演をいただいた。沖縄タイムス社会部長の屋良朝博氏は、アジア太平洋地域における米軍海兵隊の配備に関してご説明くださり、沖縄に基地を置く戦略的必要性に疑問を呈された。尚学学園副理事長の名城政一郎氏は、沖縄での同化教育の歴史とそれが「オキナワ・メンタリティ」に与えた影響、そしてこれからの沖縄の教育の在り方について取り上げられた。琉球大学教授の高良鉄美氏は、明治憲法と現行憲法を切り口として、国民が正しい情報を知らされる必要性、

太平洋戦争を終結させる可能性があった3度の機会、国民が政府の行動を牽制する憲法の役割などについてお話くださった。最後に沖縄国際大学法学部教授の佐藤学氏から閉会の言葉をいただいた。佐藤氏は、日米中は経済的に相互に依存しているため長期的にはアメリカのプレゼンスと中国の安定的発展が日本にとっては必要であると述べられた。(小田 康弘)

フォーラム後のディスカッションでは、沖縄在住の高校生、大学生と共に基地問題について話し合い、率直な意見を交換した。地元の学生の考えに触れられ、大変貴重な経験であった。最後のレセプションでは、地元の方々と交流することができた。また、財団法人沖縄観光コンベンションビューローのご協力により、琉球舞踊を鑑賞した。最後に、来賓及び日米学生会議参加者全員でカチャーシーを踊った。有名な伝統芸能を単に鑑賞するだけでなく、踊り手との交流や自ら体験することを通して伝統芸能を深く堪能することができた。(富沢 瑠美)



沖縄フォーラムにて

・平和学習

琉球大学の山内榮氏に案内していただき、平和祈念公園、糸数壕、ひめゆり平和祈念資料館、荒崎海岸を訪れた。平和祈念公園では平和の礎の傍らで沖縄戦についてのお話をうかがい、戦没者の慰霊碑に手を合わせた。糸数壕は、沖縄戦の際に南風原陸軍病院の分室として使用され、ひめゆり学徒隊の一部が看護にあたった自然洞穴である。懐中電灯の光を頼りに洞窟内を進んでいくと、暗

くひんやりとした空間が広がっていた。また、荒崎海岸は沖縄本島南端に位置し、ひめゆり学徒隊をはじめとする多くの民間人が自決や米軍の攻撃によって命を落とした場所である。広大な海に面した慰霊碑「学徒隊散華の跡」の前で、平和ガイドの方のお話をうかがいながら各自が沖縄戦当時に思いを馳せた。(阿部 彩織)

・宮良ルリ氏のご講演

ひめゆり学徒隊の一員として沖縄戦を経験された宮良ルリ氏を語り部としてお招きしお話をうかがった。日米学生会議のように、過去に敵対する関係にあった二カ国の若者が一堂に会し、話し合いの場を持つことは素晴らしい、平和な世界を創るリーダーになってほしい、とのお言葉をいただいた。次世代を担うものとしての責任、使命を感じた。(阿部 彩織)

■ サイトコーディネーター後記

第57回日米学生会議より6年ぶりの沖縄開催。実に多くの県内の皆様にご協力いただき、沖縄の諺で「一度会ったら皆兄弟」を意味する「いちやりばちよーでー」の精神を実感した。特に、「沖縄サポート委員会」のご尽力なしには、会議を成功裏に終えることはできなかった。

不思議なご縁の結びつきで生まれたサポート委員会は、日米学生会議 OB であり石垣市保健福祉部健康福祉センター医師の城所望氏にお招きいただいた12月の石垣島での親睦会がきっかけで発足した。財団法人沖縄観光コンベンションビューロー元常務理事の洲鎌孝氏に沖縄開催の相談をしたところ、「是非その素晴らしい人材育成事業を成功させたい」とおっしゃっていただいた。後日、洲鎌氏の呼び掛けで、琉球大学副学長の犬城肇氏、レキオファーマ株式会社代表取締役の奥キヌ子氏、株式会社トリム代表取締役の新城博氏がお集まりくださり、ご協力を約束してくださいました。その後、3月に奥氏が「実行委員会を組織しよう」と元沖縄県副知事の比嘉幹郎氏に委員長に就いていただけるようお願いしていただきました。そ

こに、県内の日米学生会議 OB や各界の有力者が加わり、最終的には元沖縄県知事の稲嶺恵一氏を名誉会長に、合計14名の方々がメンバーとなってくださった。沖縄と東京とアメリカをインターネット電話で繋いで隔週でミーティングを開き、行程の決定、財務活動、宿泊施設や食事の手配とあらゆる面でご協力いただいた。

サポート委員会内では、株式会社時事通信社那覇支局長の野口安計氏が率先して事務作業を担ってくださった。名桜大学国際学群講師の大城美樹雄氏は名護でのプログラムをコーディネートしていただき、沖縄フォーラムの運営は沖縄国際大学法学部教授の佐藤学氏が一手に引き受けてくださった。城所氏と浦添市福祉事務所保護課の平良誠氏には、日米学生会議経験者として他の方々との橋渡しをしていただいた。比嘉氏、奥氏、洲鎌氏は各方面への繋がりを駆使し、私どもの我が儘な望みを全て実現してくださった。

サポート委員会外では、沖縄尚学高等学校の皆様、特に教頭の与座宏章氏と広報部の鎮目耕平氏に、スクールバスの手配など様々な面でご尽力いただいた。名護市役所の皆様、特に企画総務部総務課秘書係長の仲里幸一郎氏には、稲嶺進市長のご講演を中心にご協力いただいた。また、稲嶺進市長は予定の時間を大幅に延長して私どもの質問に答えてくださった。名桜大学国際学群教授の仲地清氏、宜野湾市基地政策部の新里優氏、沖縄タイムス社会部長の屋良朝博氏、尚学学園副理事長の名城政一郎氏、琉球大学教授の高良鉄美氏、元ひめゆり学徒隊の宮良ルリ氏は、旧盆中のお忙しい時にもかかわらず、快くご講演を引き受けてくださった。また、名桜大学国際学群教授の与那覇恵子氏には2度にわたり素晴らしい通訳をしていただいた。株式会社沖縄ファミリーマートには、営業部店舗支援グループの宮城吉博氏のお取り計らいで滞在中お弁当を各地に届けていただいた。南部での平和学習では、琉球大学非常勤講師の山内榮氏に終日ご案内いただいた。琉球朝日放送、琉球新報、沖縄タイムス、日本放送協会の皆様は、私どもの活動を大きく取り上げてくださった。

第3章 本会議・サイト活動

上記の他、ここではお名前を挙げることでできない事に多くの皆様のご声援、ご協力のもと無事に会議を終了することができました。この場を借りて御礼申し上げます。今回の企画が蒔いた種が、

将来、沖縄をはじめ世界各地で花開くことを願って、筆をおかせていただきます。(下地 邦拓、竹内 智洋、山田 晃永)



東京サイト(8月15日～8月21日)

■サイトコーディネーター

奥谷聡子

尾崎裕哉

Yuri Hongo

Dan Jodarski

(サイトスタッフ)

五十嵐淳

石川陽平

河村統治郎

小池あずさ

塩原梓

吉本理沙

館林真一

■サイト概要

現代的なビル街と古き良き町並みが混在し、CNNに世界一魅力的な都市として選ばれた東京。昭和の高度経済成長期を経て、今や人口1300万人にもものぼる東京は、伝統文化から近年はファッション、マンガ文化などの新たな一面を持ち合わせている。他方で、国内外の諸問題に関して、国会や省庁では日本の未来を左右する決断が日々下されている。最終サイトとして分科会の議論を大成し、政治経済の中心地である東京から発信することで、1カ月に亘る会議を締めくくりたい。

■活動の指針と目標

- ・日本政治と外交の関係を理解する
- ・1カ月の集大成を社会に発信する
- ・会議後も活動を継続していくための土台を形成する

■サイト日程

8月15日(月) 沖縄から到着

8月16日(火) 米国大使館訪問、分科会活動

8月17日(水) 分科会活動

8月18日(木) ファイナルフォーラム、外務省
主催レセプション

8月19日(金) 実行委員選挙、東京フォーラム、
アラムナイレセプション

8月20日(土) 日中学生会議合同セッション、
ファイナルディナー

8月21日(日) アメリカ側参加者帰国

※宿泊場所 国立オリンピック記念青少年総合センター

■具体的な活動

・米国大使館訪問

米国大使館では、講演に先立ち東日本大震災におけるアメリカからの協力で日本側参加者から色紙を渡し、感謝の意を表明した。続いて、政策、経済、広報、総領事館等の部署で活躍する4名の方々よりご講演をいただいた。まず、各部署における普段の業務内容を紹介していただき、その後は日米関係、安全保障、核問題、グローバル社会における若者の役割について、各講演者の見解をうかがった。1時間という限られた時間の中で、大使館の方々はその半分を質疑応答の時間に充ててください、日米両国の学生からは日米関係に関する鋭い質問が挙がり、講演者の方々もその熱意に応え、一つひとつ丁寧にお答えくださった。あっという間に過ぎた1時間だったが、訪問終了後は将来への目標も生まれたのか、生き生きとした参加者の姿が印象的であった。(館林 真一)

・ファイナルフォーラム

東日本大震災という共通の事柄を考察した中間報告会に対し、ファイナルフォーラムの発表は、

中間報告会にもとづいたものや、そこから視点を変えたものなど、分科会によって様々だった。1カ月の集大成ということで、発表の形式や内容を決めるべく議論に議論を重ねた。各分科会は、中間報告会からの議論の経過や、1ヵ月かけて導き出した結論を発表し、その中では参加者の英語やプレゼンテーション能力の上達が見受けられた。また、各分科会の議論の成果を他の分科会や一般の方々に共有する良い機会となった。(吉本 理沙)



エリック・ティリー氏によるご講演の様子



アメリカ側参加者による代表スピーチの様子



田中均氏による基調講演の様子

・外務省主催レセプション

外務省以外にも文部科学省や賛助団体の方々、日米学生会議同窓会会長、副会長がお越下さった。国際教育振興会賛助会会長の南原晃氏による挨拶に始まり、新宿のサンルートプラザホテルで盛大に執り行われた。レセプションでは、様々な方々のお話をうかがう機会があった。外務省の方に、どうすれば外交官になれるのかをうかがえた。「どうすれば国務省に入れるのか」というアメリカ大使館でうかがったお話と比較すると、やはり、日本では新卒一括採用の伝統が残っており、学部から外務省に入省する人が圧倒的に多い。日米学生会議が終わって、就職活動を控え、官民どちらの道を歩むか迷っている私にとって、非常に参考になる意見をいただきました。改めて関係各位に深く感謝している。(五十嵐 淳)



外務省主催レセプションの様子

・東京フォーラム

第63回日米学生会議最後の講演会である東京フォーラムが、青山学院大学で行われた。前日にファイナルフォーラムを終えた達成感と、日米学生会議がとうとう終わりに近づいているという寂寥感はその参加者にも共通してあったのではないだろうか。

東京フォーラムでは、青山学院大学学長の伊藤定良氏、慶應義塾大学塾長の清家篤氏、元防衛大学校教授の孫崎亨氏、青山学院大学国際政治経済学部教授の中山俊宏氏からご講演をいただいた。中国など新興国の台頭や、3月の東日本大震災に関する講演は唆暖に富むものであり、日米の若者が協力し未来を構築していくにあたり、多くのヒントが示された。(小池 あずさ)

・アラムナイレセプション

青山学院大学のアイビーホールにて「アラムナイレセプション(日米学生会議OBレセプション)」が開催された。OBの方々との関わりは、長い歴史を持つ日米学生会議の大きな魅力の1つである。事前活動時から同窓生の方々と交流する機会は何度かあったが、今回の会は2つの意味で特別な会であった。1つ目はアメリカ側参加者も交えた会であったことだ。アメリカ側参加者もこのように何年も前の参加者が一同に集まっていることに驚いている様子であった。そして2つ目には、前日にファイナルフォーラムがあり、ほぼ全てのプログラムを終えた後の会であったことである。本会議前にお話したOBの方々にこの3週間がどのようなものであったかを報告し、その時に初めて第63回日米学生会議もとうとう終わるのだ、ということを実感した。そして必死に駆け抜けてきたこの3週間を、日米学生会議の77年間の歴史の一部という文脈の中で捉え直すきっかけとなり、改めてこのような貴重な機会を得られたことに対して感謝せずにはいられなかった。(塩原 梓)

・日中学生会議合同セッション

日米学生会議史上初となる日中学生会議との交流を行った。両参加者は事前に選んだテーマをもとに、安全保障や日米中経済の行方などについて両会議から4人ずつの計8人で話し合った。世界の問題を語る上で今や欠かすことのできない中国の学生が今どのようなことを考えているかを知ることができる素晴らしい機会だったと思う。参加者たちは、各々の意見を主張し合い、相互理解を深めた。ただ残念なことに、日中学生会議の公用語は英語ではなく、予想以上に意見の交換が難しかった。全体的な印象としては、議論に臨む態度や雰囲気に関して、文化の違いを鮮明に感じたアメリカ人と比べて、中国人学生は日本人学生と非常に似ていると感じた。(河村 統治郎)



日中学生会議合同交流会の様子

・ファイナルディナー

ファイナルディナーでは、第63回日米学生会議を振り返る会話があちこちで聞かれ、会場は興奮に満たされた雰囲気となっていた。本会議直後に誕生日を迎える4人の学生に「ハッピー・バースデー」が歌われ、サイトスタッフによって作成されたスライドショーが流された。

最後に、本会議を振り返るムービーが流され、1年間にわたり第63回日米学生会議を企画・運営をしてくれた実行委員のために、皆の感謝の気持ちを込めて作成したムービーと刺繍入りのタオルがプレゼントされた。1ヵ月で築かれた思いを少しでも伝え合うため、皆が語り合い、抱き合い、泣き合った。(石川 陽平)

■サイトコーディネーター後記

最終サイトとなる東京でのイベントを企画するにあたって、東京サイトコーディネーターは「最高の経験と環境を提供すること」と『『知ることから創ることへ』という理念の実現』を強く意識していた。最終サイトを企画する者としての、第63回日米学生会議を総括し、参加者一人ひとりの今後と次回会議に繋げる責任があると感じていたからだ。すなわち、日米学生会議の終わりを人生の新たなスタートにするための基盤を作る役割を私たちは担っていたのだ。

限られた日程の中でそれを実現することは容易ではなかったが、ファイナルフォーラムや東京フォーラム、レセプション、新実行委員選挙及びリフレクション、加えて日中学生会議との合同

イベントなどこれまでの会議になかった企画の実現にもこぎつけた。ファイナルフォーラムでは青山学院大学の大ホールに100名を越える一般の聴衆を迎え、各分科会が1ヵ月の議論の成果をパワーポイントやパンフレットにまとめて発表した。第1回日米学生会議の開催地として縁のある青山学院大学にて63回目の会議が有終の美を飾ることができたことを大変誇らしく、また嬉しく思う。

最後に、フォーラムの会場を手配してくださった山本東生氏、お忙しいなかお越しく下さいました講演者の方々、多大なるご協力をいただいた青山学院大学の皆様に御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。(尾崎 裕哉、奥谷 聡子)



ファイナルディナーの様子



ファイナルフォーラムの様子